

「運命の人」と札幌オリンピック

今から40年前、私は司法試験の受験生であった。従って、職業的には無職であった。その受験生が、朝日新聞に投書した。それは、沖縄返還にあたっての日米の密約とそれに対する当時の内閣総理大臣の対応についてである。佐藤栄作は、「密約など無い」と公言していた。横路孝弘衆議院議員が、予算委員会で、密約についての文書を暴露した。

ウソがばれたのである。ウソをついてきたことに佐藤栄作は、「政治的責任を感じる」と発言した。この「責任」という言葉に、私は違和感を覚えた。それが投書の動機であった。佐藤栄作は、「責任」など感じていなかったことは明白であった。その後の歴史によって、密約が存在し、その通りに沖縄の基地が運用されていたことが明らかになった。毎日新聞社の西山太吉記者は国家公務員法の共犯として起訴され、有罪判決を受けた。歴史が、密約・裏取引があることを明らかにしたにも関わらず、裁判所は、西山記者を有罪とした。

アメリカの公文書で明らかになった事実でも、「密約」はなかった扱いである（歴代外務大臣の答弁）。政権交代しても、このスタンスは変わらない。歴史が歪曲されているのである。一方、メディアは、情報源である女性事務官との事の下ネタのように書きまくった。HBCの「運命の人」は、ほぼ事実にしてドラマ化したものである。

沖縄の戦後史を見ると、沖縄に基地を押し付け、無理やり我慢しろと言っている。普天間の辺野古移転に沖縄県民が反発するのも当たり前である。地方交付金を上乗せすればよいという

ものではない。沖縄の海兵隊を岩国に移転させる案が出た途端に、玄葉外務大臣は反対を表明している。あくまでも沖縄に基地を押し付けようというのである。あれから40年経ったが、「核抜き・本土並み」は、まったく実現されていない。

この年の2月、札幌でオリンピックが開催された。「虹と雪のバラード」は大変懐かしい曲である。日の丸飛行隊が金・銀・銅のメダルを独占したことや、寒い屋外リンクで男子500メートルのスケートを見たのも思い出である。40年経っても、基地のない沖縄は実現していない。40年は長すぎる。このことに、我々は、どう発言していけばよいのか。

最後に、朝日新聞に載った投書をここに転載する。言葉が軽いのは、もはや内閣総理大臣だけではない。政治家そのものの言葉が軽いのである。